

「ああ、美味い……。全身に活力が漲るようだ！」  
 私はそれを浴びるように食べ尽くす。その食感と弾ける肉汁はこの世のものとは思えないほど素晴らしい。  
 どうしてこんなにも幸せな気持ちになれるのか。  
 それはやはり……。



「好きです」

初めての気持ちだった。純粹に彼女が好き。言語化した理由付けは出来ないけれど、ただ、彼女と一緒にいたいと強く思った。

彼女はある時偶然立ち寄った食堂の看板娘で、一生懸命働いている様子が素敵だった。配膳だけでなく調理もこなす彼女が輝いて見えた。

決して胃袋を掴まれたせいで好きになったわけではない。彼女の精一杯働く姿に惹かれたのである。

「わたしの料理をこんなに好いてくれた人、はじめてかもしれません！ いつもわたしじゃなくて大将の作った料理を出せなんて文句を言われるくらいなんですよ！ そりゃまあ、わたしなんかより大将のほうが上手かもし

れませんが……」

彼女は私の「好きです」という言葉を料理に対してだと解釈したらしい。本来の意図とは異なるが、それに喜んで笑顔を弾けさせたり、かと思えば口を膨らませて拗ねたりする様子にまた魅了される。

「そうだ！ 良かったら今度うちに料理を届けてくれませんか？ 実は母の誕生日なんですけど、ぜひあなたの料理を食べさせてあげたいと思ひまして……。あっ、もちろんお代は払いますので」

勢い任せの駄目もとでそんなことを言ってみると、彼女はキョトンとして、暫ししてから言葉を発する。

「うえっ、冗談じゃなくって、そんなにわたしの料理を気に入って下さったんですか？ 嬉しいですよ！ ありがとうございます。ぜひ作らせて下さい！ 日付はいつですか？」

どうやら乗り気のようなのだ。こちらとしても、好きな人がこんなにも嬉しそうにしてくれると幸せな気持ちになる。

「ええっとそうですね……。母の誕生日は……。来週の土曜でしょうかね」

問題はこの日に彼女が来られるかである。難しそうな日付を変えることも辞さないが……。

「来週の土曜！ なら大丈夫です！ とびっきりのご馳走用意しますからね！ お届けは夕方がいいです

か？」

心なしかいつも以上にハイテンションな彼女の様子に、私もつられてワクワクしてくる。

「はい、十九時くらいでお願いします。住所は——」

こうして、来週の土曜日に彼女が我が家にやってくる  
ことになったのだ。きっと彼女のハートをつかんでみせ  
よう。そう心に誓い、当日がやってくるのを準備して待  
った……。



「こんばんは！ お誕生日特別ディナーセットのお届け  
ですよ」

土曜日は夜七時。待ちに待った彼女が我が家にやって  
きた。

「おおお！ ありがとうございます！ 母がぜひお礼を  
言いたいと申していましたし、誕生日会場までこのまま  
料理を運んで頂いても良いですか？」

そう言うと彼女はお礼なんて申し訳ないなどと言いな  
がら私に付いてくる。向かう先のパーティ会場——ただ  
の居間だが——からは笑い声が聞こえてくる。

彼女には先に部屋に入ってもらうよう促し、扉を開け  
る。

そこには誰もいなかった。

ただ、点いたままのテレビ番組が何やら楽しそうな声  
をあげている。

「あれ？ お母様は？」

彼女は不思議そうに首を傾げる。その様子が、一層魅  
力的だ。

「ああ、食べ物を先にテーブルに用意してから母を呼ば  
うと思ひまして……」

そう言いながら部屋の戸を閉め、彼女に近づく。

「いただきます」

彼女が魅力的なのがいけないのだ。

彼女が首を傾けたのがいけないのだ。

彼女が艶やかなのがいけないのだ。

私は彼女の首筋に思いきり噛みついた。

「ああ……美味しい……。全身に活力が漲るようだ……」

私はそれを余すところなく浴びるように噛り尽くす。

生々しい肉の食感とみずみずしい真っ赤な血液はこの世  
のものとは思えないほど素晴らしい。彼女から生まれた

鉄の匂いが肺の中に充滿する。あたたかい彼女が私の中に染み込んでくる。彼女と完全に一体化したような心地さえ覚える。

どうしてこんなにも幸せな気持ちになれるのか。それはやはり、これから永遠に彼女と一緒にになれるから。私の血肉になった彼女は、私が滅びるまでここにいる。

彼女だけの一度きりのご馳走。

彼女は私となり、私は彼女に染まる。もう決して別れることはない。常に二人は共にある。

私はここに彼女を感じ、彼女の幸せを受けて生きられるのだ。

「一緒になってくれてありがとう……」

口から溢れる台詞は、私のものか、彼女のものか。

幸せの味を噛み締めるその足元に、もう作ることも出来ない、幻の料理が転がっていた。